
悪魔と契約しちゃいました

ガラクタ・エントツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と契約しちゃいました

【Nコード】

N5093Y

【作者名】

ガラクタ・エントツ

【あらすじ】

異世界は現実の世界の直ぐとなりにあるらしい。何の因果か、悪魔と契約してしまった主人公が、事件解決に仲間と共に奮闘すること。

第1章 「呪われた少女」 友人の頼みにより、なぜか学年一の美少女と付き合うことになった主人公。当然、そんな上手い話があるわけがなく・・・ 第2章 「恋のまじない」 第3章 「赤い糸」 など気楽に読める短編・中編集になる予定です。

第1話 悪魔と契約しちゃったかもしれない

「本当に、悪魔と契約してしまったかもしれない」

ここで言う悪魔とは別に、高利貸しでもなく、鬼嫁でもない。
文字通り本物の悪魔だ。

帰宅の途中、怪物に襲われて、悪魔に助けてもらったわけでもなく。

朝、目覚めたら、隣に可愛い小悪魔が裸で寝ていたわけでもなく。
別に誰かを恨んでいたわけではなく。世界征服をしたく召喚した
わけではなく。

ただ、単純に勢いで、近藤信也は悪魔と契約してしまった。

近藤信也は、自分の手の中にある 아이폰 を見て、そう思った。

2

美女。それは、遠くから見るもので、自分には縁がないもの。そ
う思っていた。

彼女。妄想の恋人ならいますが・・・現実にはいません。
恋。片思いならベテランです。

出会い。それは・・・突然にやってきた。

学年一の美少女、水上麗華みなかみれいかが、なぜか僕の目の前に居る。

少女は垂れ目で少々童顔、ストレートロングな髪で清楚なお嬢様

の雰囲気を漂わせていた。

その一方で、出るところは出ているグラマーな体形なので、男子の間での人気は断トツだ。

彼女と今まで一度も話したことがない。というよりも、半径5メートル内に近づいた記憶もない。

そんな彼女が、なぜか、同じ部活の星野守と久保恵に連れられ目の前に居る。

何でも、僕と彼女彼女の関係になりたいらしい・・・建前上。

なんじゃそれ。

彼女には、変な噂がある。

彼女の彼氏になった男は死ぬ。という噂だ。

第2話 彼女

彼女に初めて彼氏が出来たのは、中2の夏。

同じクラスメイトだった。でも、最初の彼氏は、付き合い始めて3週間後、交通事故で死亡。

2年後、高校生1年生になった彼女は他の学校の3年生と付き合い始めた。

でも、その彼氏は、1週間後に行方不明になった。

以前にも家出をしたことがある彼の失踪は、家出ということでは、社会的には処理された。

この頃から変な噂が出始めた。

彼女の彼氏になった男は死ぬ。

彼女の美貌と人気に嫉妬した一部の女生徒や彼女に振られた男たちの悪口だった。

しかし、その噂は、悲しみに打ちひしがれた彼女をさらに追い詰めるものだった。

そんな彼女を励まし、救ったのが、昔ながらの幼馴染の少年だった。

半年後、彼女は幼馴染と晴れて恋中になった。しかし、その3番目の彼氏は、2週間後に自殺した。

これで確定的になった。彼女の彼氏になった男は死ぬ。

そんな噂が経っても、中には挑戦する猛者が居た。

4番目の彼氏は、2週間後に病気になった。

それ以降、多くの男たちに告白されていた彼女に対して、さすがに告白する男は居なくなつた。

以前は学年の中心的人物だった彼女は、「呪われた女」「不幸を撒く女」と悪口を言われ、女生徒にも避けられ始めていた。

「つまり、彼女の噂が事実でないことを証明するために、実験台になれと」

「そういうこと。確か、先週、オカルトネタは、ほとんどは偶然か勘違いか嘘って言ってたよな」

「確かにそうだけど・・・」

魔法や霊能力が起こす事件なんて存在しない。

推理小説好きの近藤としては、不思議なこと＝霊的な物という考えは受け入れられなかった。

万が一、幽霊が居たとしても、テレビやネットで騒がれるのは、99%紛い物。

それが、先週の近藤の主張だった。

もしか、先週の会話は今日の伏線だったのだろうか？

星野にはめられたようだ。

「なんで、自分なんだ。星野の方が良いじゃないか・・・水上さんだって、僕より星野の方が嬉しいだろ」

「・・・」

久保と水上がお互いの顔を見合った。そして、水上が口を開いた。

「星野君は・・・駄目だよ」

「??？」

「星野君は、皆の王子様だから・・・」

星野王子様。それが女性との間での星野守の二つ名だ。
見た目も良く、運動もできて性格の明るい星野は、女生徒に人気
があり星野王子様と言われていた。

そして、王子様は誰のものでもない。皆のもの。だから、誰も手
を出してはならない。

これが、この学校の女子の間での不文律である。

ちなみに、女性との間での近藤の二つ名は金魚のフン。

星野に、いつも付いている邪魔なものと言っ意味らしい。

「こんなこと頼めるのは、お前しかいないだろ。それにこういうの
嫌いじゃないだろ」

正直言つて嫌いじゃない。

推理小説好きが高じて、名探偵にあこがれていた。
新聞を見て、推理するだけでは飽き足らず、高校生探偵と称して、
高校生相手に私立探偵の真似ごともしていた。

もっとも、漫画や小説のように活躍できるわけがなく、依頼の内
容の大半が浮気調査だったけど。

「お前、彼女ことが可哀想だとは思わないのか？」

「思う」

「なんとかしてあげたい。力になりたいと思わないのか」

「思う・・・」

何か星野に丸めこまれている気もするが・・・力になりたいと言
うのは嘘ではない。

機会がなかったから何もできなかったが、彼女が「呪われた女」

「不幸を撒く女」と悪口を言われているのを聞き、良い気持ちはい
ていなかった。

しかし、簡単にOKの返事は出来なかった。

自分が死ぬかも、と言うこと以前に・・・

「1つ問題があんですけど。その・・・僕には、好きな人がいるんですが・・・」

クラスメートの小野寺さん。

好きな人がいるのに、他の人と付き合うなんて浮気みたいではないだろうか。

それに、このことが原因で、小野寺さんに嫌われる、縁が切れるようなことはないだろうか？

「問題ないよ。今後、付き合う可能性はないわけだし」

「・・・」
さらっと、とんでもないこと言うな久保は。

久保は、小野寺さんと仲が良いので、真実味があるだけ心に刺さる。

「本当に彼女のことを好きになれって言うてるわけじゃないんだよ。

」と星野。

「建前だよ。建前上。それに、嘘でも、女性と付き合えば、本命と付き合う際の練習になるだろ」

星野が近藤の側により耳元で女性陣に聞かれないように囁き始めた。

「それにな。女性って言うのは、フリーの男よりも、他人の男を欲しがるもんなんだよ。彼女と付き合えば、小野寺さんの関心もお前に向かうこと間違いなしだ」

そういうものなのだろうか？

女心に疎い近藤には判らなかつた。

第3話 下校

その日の下校は、いきなり、彼女と一緒に下校することとなった。付き合っていることを皆に暗に教えるためだ。

近藤は自転車通学なのに対して、水上は電車通学なので、駅まで一緒に帰ることにしたのだが……

話すことがない。

近藤は自転車を転がしながら、水上に付いて行くだけだった。

気を利かせて、水上さんの方から話しかけてくれることを近藤は期待したのだが、水上も、何も話さずにただ黙々と歩くだけだった。

星野や久保が居た時は、平気で話せたのに、2人っ気になった瞬間、近藤は何も話せなくなった。

偽りの恋人なのに、緊張で話せなくなるとは、もし、本当の恋人だったらどうなっていたのだろうか。

星野が言っていた、本命と付き合う際の練習になるといっものは、もっともな指摘だった。

近藤は、自分はまだもう少しこういう状況になれておくべきだと思った。

気不味い、長い長い沈黙の後、どうにか駅に付いた。

「じゃあ、ここでさようなら。また明日、8時にね」と近藤は別れの言葉を告げた。

「恋人と別れるのに、それだけなの？」

「他に何か？」

「お別れのキスは？」

「.....」

おそらく、自分のことを試しているか、からかっているのだろうと近藤は思った。

「ここでキスをすれば、恋人らしく見えるでしょ」

水上はつぶらな瞳で、近藤のことを見つめながら言った。

照れくささから近藤は、思わず視線を逸らしてしまう。

周囲を見渡すと、当然のことながら、同じ学校の生徒が何人も駅前に溜まり立ち話をしていた。

確かに水上さんの言うとおり、この場でキスをすれば周囲に恋人同士であることを印象付けられるだろう。

「演劇部なんだからできるでしょ」

「照明と音響の係んだけど.....」

「じゃあ、私の方からしたほうが良い？」

それは、さすがにまずいと近藤は思った。

「判った。右手を出して」

「こっつ？」

近藤は彼女が刺し出した右手に軽く自分の右手を添えると、少し腰をかがめ、手の甲にキスをした。

「これが僕の限界です.....」

近藤が顔を上げ、水上さんの顔を見ると、驚いている様子も、怒っている様子はなく、むしろ少し喜んでいるようだった。

「今日のところは、これで許しあげるか。じゃあ、明日ね。バイバイ」
水上はそう言うと駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

近藤が家に着くと、珍しく家は明かりがついておらず、真っ暗だった。

通常なら妹である三女の里桜りおうが帰って来てる時間なのに。

『友達の家にも行っているのだろうか？』

そんなことを考えながら、近藤が鍵を開け、家の扉を開けると・

「パン！パン！パン！」

暗闇中で鳴る火薬の軽い爆発音。

一瞬、何かと思ったが、よく聞きなれたクラッカーの音だった。

電気がつくと、目の前には小六なのに、170センチ近い身長身長の妹の里桜りおうが居た。

「お兄ちゃん。おめでとう」と、なぜか妹からの祝福。

「えっ、なんで？ 1月生まれだから、誕生日とか全然先だし」
近藤には、何が起きたのか理解できなかった。

長身の三女、里桜の背後から、これまた長身の次女の美桜みおうが現われた。

「いや、信也くん。彼女出来たんだった。何でも．．．早々にキスもしたそうじゃないか。しかも路上で」

「なんでそんなこと知っているんですか」

「そりゃ、星野君からに決まっているだろ」

お酒を既に飲み、酔っている姉は嬉しそうに答えた。

「学年一の美少女なんだって。おねえちゃんは鼻が高いよ。これからおねえちゃんが、みっちりと女の子を喜ばせるコツを教えてあげるよ。付いて来なさい」

その夜、近藤は三時間ほど、姉の講釈を聞くこととなった。

「今日下校の時に、近藤とキスをしたんだ」

水上は、ベットに寝そべりながら、小学校からの親友で同じ部活でもある高井まどかに、今日の出来事を話していた。

同じ部活と言っても、部活の間は練習しているので私語は話せない。

水上は毎日、30分、長い時は2時間ほど高井と話していた。

高井まどかは、運動もでき活動的でボーイッシュと、水上と対照的だったが、不思議と昔から仲が良かった。

「マジかよ。演技じゃなかったのかよ。近藤と付き合っつのは」

「演技だけど．．．どうせするんだったら、本当らしくした方が面白いでしょ。それにしたのは、唇じゃなくて、手の甲よ」

「手の甲？」

「そう。唇にしても良かったのに。恋愛経験がない子って、面白いよな」

第4話 恋人

次の日は、朝から水上さんと一緒に登校した。付き合っていることを皆に暗に教えるためだ。

昨日の下校時よりも、皆が近藤を見ているような気がした。事実そうだろう。

そして、教室に入った瞬間、ざわつく教室と集まる視線に、近藤は自分がクラスの話題の中心、注目の的であることが良く判った。

そして、予想通りクラスメートの1人が、食いついて来た。しかし、予想外の人物だった。

近藤に最初に声をかけてきたのは、活発な雰囲気を感じさせるシヨートヘアの美少女。

僕の斜め前の座席に座る憧れの女性、小野寺さんが聞いてくるとは思わなかった。

「近藤君。水上と一緒に学校来たけど。もしかして付き合っているの?」

その質問に、クラスの注意が自分に集まっているのを感じた。

何とも言い辛い。

「その・・・付き合うことになりました」
背後から歓声上がる。

「いつから付き合っていたの」

「つい最近かな」

「どっちから告白したの」

これはさすがに自分とは死んでも言えない。

「なっ．．．何となく．．．あえて言うとな彼女かな」

「そうなんだ。星野君や恵ちゃんも知ってたの？」
側に居る星野と久保に話しかける。

「あたしも昨日知って驚いたよ」

久保は白々しく答えた。

「星野君は」

「僕はもう少し前から。近藤に相談されてね」

した覚えはないんですけど。

こんな感じで、他の女生徒も巻き込んで、会話は先生が来るまで終わらなかつた。

一方、水上麗華もクラスメートから質問を受けていた。

「ねえ、麗華。6組の近藤と付き合っているって．．．本当？」

最初に、声をかけてきたのは、麗華の小学校時代からの親友の高井まどかだ。

事前に、高井まどかには話しており、これは演技だった。

変なことを聞かれないように、事前に聞き役を高井まどかに頼んでおいたのだ。

もっとも、細かいやり取りは決めておらず、アドリブでやることになっていた。

「本当よ」

周辺からどよめきの声が上がった。

「3組のバスケット部の近藤君じゃなくて、本当に6組の近藤なの？」

「そうよ」

「あの地味で、金魚のフンって言われてるアイツだよ。星野君じゃなくて？」

「そうだよ」

「えっ。なんで！！！」と高井まどかは声を荒げた。

「麗華。親友でしょ。なんでそういう大事なこと、私に一言も相談してくれなかったの」

「ごめん。いろいろあつて。それに、近藤君って．．．そんなに悪い人じゃないと思うけど．．．確か地味だし、普通の人だけど．．．」

「まあ、確かに．．．性格が悪いつて聞かないし．．．後輩の面倒見も良いつて聞くし．．．身長だつて普通より高いし．．．見た目だつて悪くないし．．．でも、どこが良いのよ」

それは聞かない約束でしょと水上は思った。

演技上の恋人同士なんだから、近藤のどこが良いのかなんて、当然、水上には判らなかつた。

だから、それを聞かれなかったために、高井に頼んだに、高井自身完全に忘れてしまっているようだ。

「それは．．．．．私にも判らない」

「何よそれ。それは一時の気の迷いよ。いろいろあつたから」

周囲の女生徒もうなずく。

「今からでも、断りに行きなよ」

「それは駄目よ．．．だつて、私から告白したんだもの」
予想外の展開に周辺の空気が凍った。

「麗華。どこが良いかも判らないのに、告白したの？」

「しょうがないじゃない。だつて、好きなんだから．．．」

2時間目の休み、男子学生がトイレに集まり雑談をしていた。

「なあ、知ってるか。近藤の話」

後から入ってきた鈴木は、高田に声をかけた。

「ああ」

「近藤の奴、羨ましいよな。あの水上麗華と付き合えるんだぜ」

「羨ましいか？ あの女と付き合つと死ぬんだぜ」

「水上と付き合つて、やれるなら、死んでも良いよ。近藤の奴、上手くやつたよな」

「お前、前から麗華のこと好きだったからな」と手を洗っていた伊東が口をはさんだ。

「死んだら意味ないだろ」

高田は、水上を美人だと思うが、さすがに自分の命を犠牲にしてまで付き合いたいとは思わなかった。

「よつぽど、男に飢えていたんだな。近藤でもOKだってことは、俺でもOKだぜきつと」

伊東は肥満気味で容姿も悪く、女生徒の評判が良くないことを自分でも認識していた。

「なんでも、水上の方が告つたらしいよ」

「マジかよ。あいつのどこが良いんだよ」

今まで水上麗華が付き合っていた男は、みんな格好良く、女性に人気がある男ばかりだった。

そのため、自分と同レベルか、それ以下だと思っていた近藤が、告白されたとの話を聞いて、鈴木は本当に悔しそうだった。

「なあ、あいつが死ぬか。かけようぜ」と鈴木。

「いいな」と伊東。

「どうせなら、他の奴らも巻き込もうぜ」

こうして、学校全体で、近藤の生死をかけて、賭けが行われることになった。

第5話 昼休み

水上さんは1組で、近藤は6組とクラスは別々。

水上さんは茶道部で、近藤は演劇部と部活も別々なので、会うのは登校時と下校の時だけと近藤は思っていた。

「昼休み。ご迷惑じゃなければ、一緒に屋上でお弁当食べませんか」
そのため、3時間目の休み時間にメールが来た時は正直予想外だった。

「その・・・こうした方が、恋人らしいかなと思ひまして」
「確かに・・・周りにも何人かいますし・・・」

既に学校の屋上には、多くの人に来ていた。
それは、いつも、教室で食べていた近藤にとって未知の光景だった。

女性だけのグループや男女混合のグループ。
そして、一番多かったのが男女二人だけのグループだ。

良い場所は既に取られていて、直ぐに、良い場所は見つからなかった。
「た。」

「どうやら、皆、早めに来て場所取りをしているようだ。」

開いている場所を見つけると、さっそく弁当を食べ始めた。

春の日射しは暖かく、隣の席に座っている水上の髪が穏やかで優しい風にふわりとなびく。

水上がお弁当を食べている姿は、特別なことは何もやっていないのに不思議なことに可愛らしく絵になった。

近藤は、水上は何をしても綺麗だなあ、と思いながら、彼女が自分には酷く不釣り合いに感じられた。

最初の数分は沈黙の時間が続いた。

姉や妹もいるし、女友達もいるし、部活では女性の方が多い。

しかし、その会話は、兄妹の会話であり、友人としての会話だ。正直、恋人同士の会話なんて判らなかつた。

最初に口を開いのは水上だった。

趣味の話から家族の話し。彼女は思ったよりも気さくな性格で、途中から思いのほか会話が進んだ。

「その・・・近藤さんのお弁当は誰が作っているんですか」

「自分で作ってます。両親が共働きで、海外出張も多くて。まあ、小6の妹以外は、みんな良い歳ですから」

「毎朝ですか？」

「毎朝。家族の分も作ってます」

「大変じゃないですか？」

「お金もらえるからね」

「そうなんですか」

なぜ、がっかりした様なリアクションをするのだろうか？

そして、何か非常に言い辛そうだ。

「その・・・少し作ってみたんですけど・・・食べていただけますか」

そう言うと彼女はカバンから小さな弁当箱を取り出した。中には、綺麗にできた手作りの卵焼きなどが入っていた。

「僕のところにも卵焼き入っているの、交換しましょう」
「そうですね」

「いただきます」
互いに互いの卵焼きを交換して食べる。

水上の卵焼きを食べてみると・・・美味しい。とろとろの卵焼きだ。自分の卵焼きが、甘めの子供向きだとした、こちらは大人向けでしょうか。

うーん、本当にいろいろできる人だな。これで運動もできたら、完璧超人ではないだろうか。

それにしても、彼女がここまで恋人の振りをするとはい意外だった。もっと片手間な物だと思っていたのだが・・・

「美味しいね」

「近藤君のも美味しいよ。近藤君はこういうのが好きなんだ」

それにしても、何なんだろう。この空気は。傍から見たら完全にラブラブのカップルではないだろうか。

「ごめんなさい。迷惑掛けているでしょ。私、今のところ、これくらいしか近藤君に恩返しできなくて・・・でも、近藤さんが自分で作るんだったら必要ありませんね。私、どうしたらいいんでしょうか？」

どうやら、恋人の振りではなかったらしい。自意識過剰だな。

「気にしなくて良いですよ。僕も割と楽しんでますし」

「そうですか。お優しいんですね」

「いや．．．それ程でも．．．」
非常に照れくさい。

一方的に相手の好意に甘える関係というのは、意外と苦しい物だ。僕としては彼女との関係を円滑にしたいのだが．．．何か彼女にしてもらえないことはないだろうか。

「そうだな。終わったら．．．小野寺さんとの仲を取りもってよ」

「それで良いんですか？」

近藤は頷いた。

「判りました。頑張ります」

彼女は頑張ることを近藤にアピールするために可愛らしく小さくガッツポーズをした。

彼女の少し明るくなった態度を見て、何か少し関係が前に進んだような感じがした。

「その．．．甘えついでに、もうひとつ、お願いして良いですか？」

「何ですか？」

「今週の土曜日、時間がありましたら．．．その．．．デートしませんか」

その言葉を聞いて、驚きのあまり、近藤は思わず、食べ物などを詰まらせてしまった。

第6話 脅迫

「土曜日にデート？ いつからそんな関係になったんだ」
星野が驚嘆の声をあげた。

場所は体育館の壇上の幕の裏。

部活の休憩時間を利用して、星野に現状報告することにした。

「今日の昼休み。彼女の方から」
近藤も得意げに報告する。

「ずいぶん楽しんでいるのね。こっちは心配で夜も眠れないのに・・・」と久保。

「冗談だろ」
「当然、嘘に決まっているでしょ」

「まあ、楽しむのは良いけど。あんまり浮かれるなよ。今、学校でお前の生死を賭けた賭けが流行っているんだから」

自分の命が賭けの対象か。

正直、気分が良い物でもないし、賭け自身法律違反だが・・・ここでそれを言っただ怒るのは野暮だろう。

「比率は？」

「2対3かな」

「どっちが3なんだよ」

「お前が死ぬ方だ」

「みんな酷いな」とは言ったものの過去3人は漏れなく死んでいるわけ・・・

みんなが死ぬ方に賭けなくなる気持ちも判らなくもない。

「だったら、生きる方に1万円賭けておいて。生きる励みになるから」

「じゃあ、俺は．．．お前が死ぬ方に1万円な」

「じゃあ、私は5千円かな」

「何だよ。それ」

「お前が死んだとき、悲しみが癒えるだろ」

「．．．．．」

「冗談だよ。俺は、お前が生きる方に1万円賭けているんだから頑張ってくれよ」

現在の時間は夕方の6時31分。1分遅刻だ。

一緒に下校するため、6時30分と待ち合わせしていたのに遅れてしまった。

水上さんが校門のところで僕を待っているが、ロビーからも見える。

その姿が妙に愛らしい。

偽りの恋人同士のはずだったのに。

登校と下校の時だけの付き合いのはずだったのに。

土曜日、デートですか．．．

何と言つか、どんどん展開がエスカレーションしている。

ひよっとしたら、水上さんとあんなことやこんなことをする関係にまで発展するかも。

そんなことを妄想しながら、僕は下駄箱を開けた。

隙間から入れたのだろうか。

中には、一枚の手紙が入っていた。
まさか、ラブレターか。
まさかのモテキ到来か。

手紙には、宛名も差出人の名前も書いていない。
急いで手紙を開けると一枚の紙が入っていて、その紙には2行の
短い判り易いメッセージが書いてあった。

「水上麗華と直ぐに別れる。

さもなければ死ぬことになるぞ」

さっきまで浮かれていた自分がバカみたいだ。

でも、この手紙でいくつかのことがハッキリした。

悪霊が手紙を出すはずがないので、彼女は人間に恨まれている。
しかも、直ぐに手紙が来たことから、たぶん、この学校の人間に
だ。

過去にも、彼女の彼氏たちは、このような手紙をもらっていたの
だろうか？

彼女に聞く必要がある。

でも、今日の下校時は止めて明日にしよう。

せめて、今日くらいは、楽しく終わりたいから。

昼休みに打ち解けたせい、昨日と打って変わって、いろいろと
話すことが出来た。

昨日は、長く感じられた時間も、なんだかあっという間に過ぎて

駅に着いた。

「じゃあ、また明日」と自転車に跨る近藤。

「近藤君。」

水上が呼び止めた。

「何？」

「頭にゴミ付いているよ」

水上は、自分の側頭部を指さす。

「そう？」

近藤は頭を払った。

「取れた？」

「取れてないよ。しょうがないな。こっち向いて。取ってあげるから」

近藤は水上に言われるがまま、何も考えず、水上の方を向いた。

その瞬間、水上は、近藤の首に手を回すと、近藤にキスをした。

とっさのことに、呆然とする近藤。

そして、我に帰ると、徐々に近藤の顔は赤くなっていった。

「男の方が、顔赤くして、どうするのよ。じゃあ、明日ね。バイバイ」

水上はそう言うと駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

近藤はベットの途中で、水上さんとのキスを思い出していた。

近藤は自分の唇に触れながら、彼女の唇の甘い感触を思い出した。

デートの話といい、今回のキスといい、彼女は予想以上に積極的だった。

単純に近藤をからかっているのだろうか。

それとも、もしかしたら、本気なのだろうか？

本気だとしたら、小野寺さんと水上さん、どちらを選ぶべきなのだろうか？

近藤は、そんなことを考えながら、いつの間にか寝てしまった。

第7話 暗い影

登校後、下駄箱を開けると、また手紙が入っていた。

封筒は昨日と同じものだ。

昨日と同じ脅迫状だろう。

手紙を開けると、昨日と同じように、短いメッセージが書いてあった。

「お前は死ぬ。残りの人生をせいぜい後悔して生きるが良い」

昨日は脅迫状だったのに、たった一晩で、死亡宣告になっている。しかも、殺すではなく、死ぬになっているところが、何とも微妙な表現だ。

昨日と今日とで違う点と言えば、キスをした点だろう。

キス一つで、死亡宣告か。

人生は、どうやら等価交換ではないらしい。

昼休み。

前日の失敗を糧に、場所取りのために、授業が終わると直ぐに屋上に向かった。

意外なことに、まだ、誰も来ておらず、1番だったようだ。

うちの学校の良いところは、屋上にベンチがある点だ。

そして、座るんだったら、南向きで温かく見晴らしが良いところ

が良かった。

近藤は場所取りをすると、水上さんを待った。

「近藤君」

背後からの呼び掛けに、振り返るとそこには、水上さんではなく、憧れの小野寺さんが居た。

なぜ、小野寺さんがこの場に居るのだろうか？
いつもは教室で食べているのに。

「近藤君。水上さんと一緒にランチを食べているの？」

「そうです」

「水上さん。近藤君のためにお弁当作ってるんだってね。美味しい？」

「なかなか、美味しい・・・です」

「ふう〜ん」

そう言つと小野寺さんは、フェンスに近づいた。

そして、振り向くと近藤に対して突然予想外の質問をした。

「ねあ、近藤君。私と水上さん、どっちの方が好きなの？」

近藤としては、当然、小野寺さんだ。

だが、現状の建前上、小野寺さんとは言い辛い。

「今、言わないと駄目ですか」

「ハッキリしないわね」

そして、何を思ったのか、突然、軽々とフェンスを超え、屋上の淵に立った。

「日射しと風が気持ち良いわよ」

「あぶないよ。小野寺さん」

「スリルがあつて楽しいんじゃない。近藤君も来なよ。それとも来る勇気ない」

弱虫に思われたくない近藤は、慎重にフェンスを越えた。

校舎は4階建てなので、地上まで十五メートル近くあるだろうか。正直、近藤はかなり怖かった。

一方、小野寺さんは、そんな場所なのに顔色一つ変えないで笑顔で立っていた。

「もう一度聞くね。近藤君。私と水上さん、どっちの方が好きなの？」

「本当に、今、この状況で言わないと駄目ですか」

近藤としては、当然、小野寺さんなのだが、近藤としては、もっとロマンチックな状況で言いたかった。

「駄目。今すぐ言つて……直ぐに行つてくれないと、飛び降りるわよ」

「そりゃ……当然……」

「近藤君。何やっているの？」と激しい口調の声が聞こえた。

声の方向に振り向くと、心痛な表情をした水上さんと、なぜか高井まどかが居た。

「その……いろいろありまして。ねえ、小野寺さん振り返ると、そこには誰も居なかった。

さっきまで間違いなく、そこに居たはずなのに。

それに、周囲には誰も居なかったはずなのに、何人もの生徒が、

既に屋上には居た。

幻覚なのだろうか？

「．．．．．ちょっと、ペンを落としまして。大丈夫です。もう拾いましたから」

近藤は自分でも下手な嘘だと思った。

近藤は、誤魔化しの笑顔浮かべながら、再び慎重にフェンスを越えた。

「．．．私．．．私．．．」

水上は、それ以上言葉を続けなかった。

そして、薄らと涙目になり始めた。

近藤には、その先の言葉が想像できた。恐らく、近藤が自殺すると思っただろう。

女性に泣かされることはあっても、泣かすことはないと思っていた近藤には、彼女を落ち着かせる気の効いた言葉が思いつはずもなかった。

「．．．．．」

側に寄ることもできず、ただ彼女を見るだけ。

水上に寄り添うように立っている高井まどかも、何も言わず僕を見つめるだけだった。

気不味い沈黙を破ったのは水上だった。

「近藤君。早く。こっちに来て、ご飯食べよう」

水上は、明るい声で近藤に呼びかけた。

「そうですね」

近藤も、無理をして明るい返事をした。

「ところで．．．なんで高井さんが居るんですか」

「あたしか？ あたしは、言わば．．．．．水上の保護者だ。お

前が水上に悪さをしないか、水上にふさわしい男かをチェックに来た」となぜか自信満々に胸を張りながら答えた。

「そっ．．．そうですか」

近藤と水上、高井は、ベンチに座り昨日と同じようにお弁当を食べ始めた。

「へえ、これが噂の近藤君の手作り弁当ですか」

「まどかも食べる？ 美味しいよ」と近藤が水上にあげただし巻き卵を高井に進める。

「いただきます」と高井は手を伸ばし、だし巻き卵を食べる。

「確かに、悪くないわね。でも、ちょっと．．．甘すぎ、お子様向きね」

そして、しばらく考え込んだ後、「85点」と点数をつけた。

「おいおい。もらっておいて、点数つけるのか？」

「言ったでしょ、チェックに来たって。今時の男は料理が出来ないのは駄目ね。まあ、毎日やっているだけあって、料理に関しては合格かな」

「そっ言う高井さんは料理できるの？」

高井から家庭的という印象は受けなかった。

「もちろん、できるよ。水上から教えてもらったから。この弁当だって、自分で作ったんだ」

そっ言うって、弁当を見せたが、ミートボールなど弁当のおかずの大半は冷凍ものだった。

「．．．この焼き鮭は」

「もしかして、だし巻き卵はできないのか？」

「出来るに決まっているだろ。明日持って来てやるよ」

「明日は土曜日だ」

「なら、来週の月曜日だ」

しばらく小学生の様なやり取りが続いた後、「明日、デートでどこに行くのか」「映画は何を見るか」「何を食べるか」などを簡単に話し合った。

近藤としても、彼女と二人だけの時よりも、高井が居た方が正直気が楽だった。

そのため、彼女たちとの会話は、表向き、昨日以上に楽しく進んだ。

だが、近藤の頭は常に別のことを考えていた。

なぜ、あんな幻覚を見たのだろうか？

もしかしたら、水上さんの彼氏たちが死んだのは、あのような幻覚を見せられたのが原因ではないだろうか？

そして、このことは、死の手が迫って来ていることを意味するのだろうか。

そして、どうすれば、死の手から逃れられるのだろうか。

近藤は、昼休み以降、一日考え続けたが、結局答えは何も出なかった。

水上との下校も、三度目となるとだいぶ慣れてきて、だいぶ話せるようになってきた。

「近藤君。私、明日のデート。結構楽しみにしているんですよ」

「水上さん。そんなにプレッシャーをかけないでくださいよ。何度も言いますが、僕は女性と二人でデートするのは初めてなんですから。水上さんがエスコートしてください」

普通の彼氏なら、彼女に対して間違っても言わない弱音だろう。

「駄目よ、それじゃ。小野寺さんのデートもリードしないつもりなの……」

「……それは……まずいよな……」

「練習で出来ないものは、本番でも出来ないのよ」

「……頑張ります」

駅に着いた。

「今日もキスする？」

近藤は、水上がキスと言っただけで顔が赤くなった。

首を振って拒否する近藤。

水上は、そんな近藤を見て、微笑した。

「じゃあ、明日ね。遅刻するなよ。バイバイ」

水上はそう言うと駅の階段を軽やかに駆け上がって行った。

第8話 呼び出し

お風呂から上がった後、近藤は寝る前にメールを確認した。
一通、差出人不明の気になる表題のメールが入っていた。

「水上麗華の彼氏へ」

急いで本分を読む。

「不幸を避けたければ、今夜十一時に、一人で ×公園に来い。ブ
ランコのところまで待っている」

いきなりの呼び出しだ。

もしかしたら、今日、脅迫状を出した人物かもしれない。
行くべきか。

行ったら襲われるかもしれない。

しかし・・・うまく行けば相手の正体を掴むチャンスだ。

近藤は大急ぎで、パジャマから外出着に着替えると、自転車で

×公園へと向かった。

×公園は、近藤の家から五分程離れ、団地の側にある小さな公
園だ。

日中は幼稚園生や小学校低学年生が良く遊んでいる公園だが、夜
の十一時にもなると、通常はさすがに誰も居ない。

しかし、今夜は、公園の外灯が、スポーツバックを地面に置きブ
ランコに座る長髪の女性を浮かび上がらせていた。

どうどうと相手が姿を現すのは、近藤にとって予想外だった。

近藤はメールの内容を信じては居なかった。

近藤が公園に近づいたところを、背後から襲う気なのではと考えていた。

そのため、相手の裏をかき、距離を置いて公園の周りを探索して、メールの差出人の正体を探ろうと考えていたのだ。

もつとも、仲間が居て、一人じゃない可能性もある。

近藤は警戒して周囲を調べるが、彼女の仲間らしき人物はいなかった。

時計を見ると十一時十分になっていた。

どうやら相手は本当に近藤と会いたいらしい。

近藤は意を決して、相手の側に行くことにした。

少し近づくと彼女の顔をより正確に見ることが出来た。

凜とした顔つきの女子高生らしき女性だ。

ベージユのブレザーにジーンズと落ち着いた服装が長身でスリムなスタイルに良く似合っていた。

鼻屑目に見ても、美人に入る部類の女性なので、同じ学校であれば覚えているはずなのだが、まったく顔に覚えはなかった。

間違いなく他校生徒だろう。落ち着いた大人びた感じなので、女子大生かもしれない。

「あなたが近藤信也君？」

近藤に気がついた彼女はブランコに座りながら僕に声をかけてき

た。
名前で呼ばれたことに驚きはなかった。相手は交友関係が広いとは言えない自分のメールアドレスすら知っているのだから、名前を知っていても何らおかしくなかった。

「そうです」

「最初から女性を待たせるなんて、ずいぶん大胆ね」

「そこは相手次第ですよ。それで話って何ですか」

「そう焦らないの。そんな緊張して立っていないで、横に座って頂戴。話辛いでしょ」

彼女は明るい声で僕を隣のブランコへ誘う。

近藤は背後に気をつけながら、彼女に横に座った。

「当然、あなた、彼女の噂知っているんですよ。なんで彼女と付き合おうと思ったの？ 美人だから。それとも、好奇心。それとも、一目惚れ？」

彼女は茶化すような口調で質問を始めた。

「そんなのあなたには関係ないでしょ」

「大いに関係あるわよ。特に私のモチベーションにね」

「モチベーション？」

変な理由を言う人だなと近藤は思った。

「そうよ。あなたが心の底から彼女を愛しているなら手伝う気になるし。好奇心なら・・・死んでも自業自得かな」

「あなたは、彼女の何を知っているんですか？」

「あなた彼女が本当に呪われていると思う？」

「彼女は、呪われていません」

「そうよね。そうじゃないと付き合おうなんて考えないわよね。彼女は呪われていない。それは正しいわ。でもね。彼氏が間違いないよ死ぬって点も間違っていないのよ」

そう言つと彼女の顔は突然真剣なものになり、近藤の目を見て話し始めた。

「今のままでは、あなたは殺される。間違いなくね」

殺される？

どうやら、彼女は事故死や自殺ではなく、他殺だと考えているようだ。

彼女は警察以上の何かを知っているのだろうか？

「あなたは、彼氏が死んだのは事故ではなく、他殺だって言うんですか」

「間違いなくね。彼女の側に、彼女の彼氏を呪い殺す人間がいるの」「警察の結果では事故や自殺ですよ。それも呪いの結果ですか？ 呪の結果、都合良く事故に合い、自殺すると」

「そうね。結果的に、この世界ではね。でも、別の世界では違うわ。彼らは悪魔に魔力で殺されたのよ」

何か話が急におかしい方向に行き始めたぞ。

「なんで、そんなことが言えるんですか？」

「それは簡単よ。私が『茨の魔女』だから。私が悪魔と契約した人間だからよ」

第9話 茨の魔女

「悪魔と契約した人間。それを信じろって言うんですか？」

「そうよ。信じられないかもしれないけど」

近藤が足元を見ると、地面から茨の蔓が伸びて足に絡まっていた。急いで立ち上がり、蔓を払い除ける。

「どうやら見えてはいるみたいね。資質はあるようね」

「今、何をしたんだ。心を見たのか」

「そうよ」

「そんなことが出来るわけがない」

「できるのよ。私は魔女なんだから。触れないと無理だけどね。だから、あなたが彼女と付き合う理由も判った。彼女が呪われていないこと証明するために付き合うなんて、あなたよっぽど、バカかお人好しね」

当たっている。何で、ここまで判るんだ。

判った。これは夢だ。

自分の夢なら、自分の心が全て判ってもおかしくない。そうに違いない。

近藤は、自分の頬を強く抓った。

猛烈に痛い。

夢じゃないのか？

「言っとくけど。痛みでは夢か現実の判断はできないわよ」

「百歩譲って、貴女が魔女だとして、僕はどうすれば良いんですか？」

「戦うしかないわね。本当は、あなたを囿にして相手を誘き出して、あたしが戦おうかと思っただけど．．．あなたに資質があるのであれば、あなた自身が戦えば良い」

自分自身が戦う。

この女性が怪しい茨を使って心を読むように、僕にも何かしらの力があると言ったことか？

「でも、どうやって。相手も判らなのに」

「相手は判っているわ。ソロモンの悪魔の1人のビフロンよ。あなたに会って、相手の正体が判ったわ」

「ビフロン？ 僕に会っただけで、なんで、そんなことが判るんですか？」

「あなた。首筋のところに、印章を付けられているわよ。見てみる。そう言つと、彼女は近藤に鏡を手渡した。」

鏡を使い首筋を見ると、彼女の言つとおり、魔法陣のような黒い印があった。

「これが呪なんですか」

「呪というよりマークね。単純な分だけ、頑固な汚れ並みに落ちないわよ」

「あなたの言うことが正しいとして、どう戦えば良いんですか」

「普通の人間が悪魔と戦うのは不可能よ。でも、あなたには簡単方法があるわ。悪魔と契約すれば良いのよ。私の様にね」

「悪魔と契約するって．．．．．簡単に言いますね」

「確かに、今すぐここで決断しろというのは難しいかもしれないわね。でも、とりあえず準備だけはしておいた方が良いわね」

そう言うと彼女は、伏せた4枚のカードを、近藤の目の前に提示した。

「この中から一枚カードを抜いて」

近藤は言われるがまま、一枚のカードを抜いた。

「絵柄を見せて」

裏返し、絵柄を見るとそこには、一人の旅人らしき男と一匹の犬が描かれていた。

「愚者。マルコシアスのカードね」

愚者？

マルコシアス？

いったい、彼女は、なんことを言っているのだろうか？

「いい。彼と付き合うコツは、正直で居ること。彼相手に嘘は駄目よ。呼び出し方は簡単。困った時に、マルコシアスと叫ぶのよ。そうすれば……多分、力を貸してくれるわ」

「そんなざっくりで良いんですか？ しかも、多分ですか」

「マルコシアスは戦闘系だから、大丈夫ね。多分」

この魔女さんは、どうやらかなり大雑把な性格のようだ。

「重要なのは、戦う意志よ。じゃあ頑張ってね」

そう言うと、彼女はスポーツバックを背負い去って行った。

「マルコシアス……」

一人残されて公園で、近藤は悪魔の名前を呼んでみた。

何も起きない。

声が小さいからだろうか。

大声では・・・恥ずかしいよな。
でも、一回くらい試してみるか。

「マルコシアス!!」

近藤は目一杯大きな声で叫んでみた。

何も起きない。

周囲を見ると、立ち止まってこちらを見ている女性が居る。

やばい、明らかに変質者だ。

近藤は、急いで自転車に乗ると、自宅へと向かった。

近藤は家に帰ると、ネットで悪魔について調べて見た。

有名なネット上の辞典に乗っており、簡単に調べることが出来た。
かなり有名な悪魔の様だ。

マルコシアス。

ソロモン72柱の魔神の1柱で、30の軍団を指揮する地獄の
大いなる侯爵とある。

その姿はグリフォンの翼と大蛇の尾を持った口から炎を吐く狼
らしい。

召喚者が望めばマルコシアスは人の姿となり、強大な戦士になる
とのことだ。

そして、翼に「炎のツララ」と呼ばれる不思議な武器を持って
いるとある。

確かに、戦闘向きだ。

ビフロン

ソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の伯爵とある。

召喚者の前に現れる時の姿は不明。死霊術や幻術にも長けているとある。

今日の幻覚は、ビフロンが見せたと言うことなのだろうか？

首筋に残っていた印は、気のせいかビフロンの印章に似ている。

こんなものは過去に見たことがないので、自分でつけたとも思えない。

魔女に会ったことやその話は、夢や幻じゃなく、やはり、現実なのだろうか。

明日デートだっていうのに、妙な悩みを抱え込んでしまったと近藤は思った。

第10話 契約

夢だと言うことは、直ぐに判った。

なぜなら、白いワンピースが出てきて、いきなり「 아이폰を欲しくないか」と聞いてきたからだ。

「欲しい。でも．．．お金ないんだけど」

「学生は、お試し1週間無料」

「なら．．．」

ミミズが這ったような魔文字は気になったけど．．．無視しちゃったよ。

お父さんに、契約勧められたら、サインするでしょ。

サインした直後に、いつも通り自分のベットで目が覚めた。

人生初のデートの日に変な夢を見たもんだと思った。

朝ごはんの準備を全て終え、居間に行くと思外のこと起きていた。

姉の真桜まおが 아이폰5を買うということで、 아이폰4をくれたのだ。

もつとも、それは口実で、妹の里桜りおが言うには、なんでも、 아이폰を使って出来る男を演出しろという姉なりの気遣いらしい。

その程度のこと、近藤が出来る男になるとは思えないのだが．．

．．．．．ありがたく貰うことにした。

夢の中の願いが、早々に現実になったのだ。

「本当に、悪魔と契約してしまったかもしれない」

ここで言う悪魔とは別に、高利貸しでもなく、鬼嫁でもない。
文字通り本物の悪魔だ。

帰宅の途中、怪物に襲われて、悪魔に助けてもらったわけでもな
く。

朝、目覚めたら、隣に可愛い小悪魔が裸で寝ていたわけでもなく、
別に誰かを恨んでいたわけではなく。世界征服をしたく召喚した
わけではなく。

ただ、単純に勢いで、近藤信也は悪魔と契約してしまった。

近藤信也は、自分の手の中にある 아이폰 を見て、そう思った。

偶然に決まっている。まぐれだ。

でも、万が一．．．本当だったら．．．僕は悪魔に願いことを叶
えてもらったことになったのだろうか。

もしかして、対価として魂を取られるのだろうか？

アイフォン4の等価交換が、魂か？

どんだけ安いんだ。自分の命は。

それとも仮契約だから別の対価だろうか。

お金がなかったので本契約ではなく、1週間お試し期間の仮契約
にしたのは正解だった。

「ねえ、お兄ちゃん知っている」

近藤が目玉焼きを食べていると、パジャマ姿の妹、里桜じゅおが話しかけてきた。

「昨日の夜、×公園に。変態が現われたんだって・・・」

「どんな変態が出たんだ」

「何でも。夜、公園で悪魔の名前を叫んで、悪魔を召喚しようとしてたんだって・・・」

もう伝わっているのか。

「お兄ちゃん。気持ち悪くない」と同意を求める妹。

妹よ。その変態は、兄です。すいません。

変態か・・・

妹のさりげない言葉に、傷つく近藤。

「そうだね。怖いね」と近藤は適当に濁した返事をした。

さすがに、自分のことを気持ち悪いとは言えなかった。

「きつと、悪魔教信者か、ゲームと現実の区別がついていない妄想バカだな。春になるとそう言う変態が増えるんだよ。気をつけるんだぞ。里桜」

姉の真桜が妹の里桜に教示した。

妄想バカ。確かにその通りかもしれない。

近藤自身、いまだに、昨日の女性の話を完全には信じられていない。

傍から見たら、間違いなく妄想バカだろう。

それにしても、昨日の夜ことがもう伝わっているのか。一体どん

だけ早い連絡網なんだ。

近藤は、近頃の小学生の情報収集能力に舌を巻いた。

十一時三十分。吉祥寺駅の北口。サンロードの入り口付近。

吉祥寺は、全国的に有名な街だけあって、既に通りは人で溢れていた。

近藤は銀行の壁に寄りかかりながら、水上を待っていた。

約束の時間には、まだ三十分もある。

近藤自身は、もう少し遅く家を出ようと思ったのだが、初デートに遅刻は厳禁と、早々に家を追い出されたのだ。

まだ、まだ来ないだろうなと思っていると・・・

人込みの中に、気のせいかよく見慣れた人影が・・・星野と久保だ。

急いで、星野に電話をかける。

「いや、星野と久保がつき合っているとは知らなかったよ。しかも同じ時間場所とは偶然だね」

「ばれちゃったか。いや、気になってね。気が付いたら、この場所に居たよ」

近藤は、後をつけないように釘を刺して電話切った。

直後、メールが来た。

水上さんからだ。

「すみません。待ち合わせ場所変更できますか」

星野と久保が居る以上、むしろ変更してもらった方が都合が良い。

問題ありませんと、直ぐに返信した。

すると直ぐに返事が来た。

「十九デパートの屋上でお願いします。オープンカフェで待っていてくださいね」

近藤は、星野と久保を巻くために、わざわざ入り組んだハーモニカ横丁を通り、十九デパートへと向かった。

第11話 永遠の世界へ

十一時二十五分。

水上麗華は、高井まどかに突然、呼び出され、吉祥寺駅側の喫茶店で会うことになった。

水上は白いワンピースにスカートと女性らしいのに対して、ボーイッシュな高井は灰色のスエットにジーンズと対照的だ。

「どうしたの。まどか。急に会って、話したいことがあるなんて」

「実は、私も好きな人が出来てね。水上に相談したくて・・・」

「本当。誰？ 私が知っている人？ 同じ学校の人」

「うん。良く知っている人」

十九デパートの屋上は、昔ながらのデパート屋上という感じだ。

コインで動く乗り物や遊具、植物が植えてあり、天気の良い休日の午後になると子供連れの家族が結構利用している。

しかし、午前中ということもあり、屋上にいるのは近藤ただ一人だ。

近藤は、言われた通り、オープンカフェで待つことにした。

やることも特にないので、屋上の出入り口や雲を見て過ごす。

待っていると、水上さんが、屋上の出入り口に現われた。

大声で呼ぶべきだろうか？

それは少し恥ずかしいので、手を振って合図を送る。

水上さんも、近藤に気が付いて、可愛らしく小さく手を振る。

「気のせいかな、水上さんの姿が歪み始めた。」

そして、再びハッキリ見えるようになると、水上さんの姿は高井さんに代わっていた。

「全然、驚かないのね」

高井まどかは、遠くから大きな声で近藤に話しかけてきた。

「そりゃ、君を容疑者の一人に考えていたからね」

「何でそう思ったの？」

「行動と動機さ。犯人の行動は、彼氏の排除を狙ったものだ。」

だから、最初は彼女のことを妬む女性や振られたことを恨む男だと考えた。

でも、あの呪いの発動条件は、たぶん肉体的接触、キスだ。つまり、犯人が本当に恐れたのは、ただ単に付き合うことではなく、肉体的接触ということだ。

そうなると、彼氏を作らせないことが目的ではなく、彼女の清純さを守ることが目的かもしれない。

そんなことを第一に考えるのは、家族か。彼女のことを聖女のように崇める人間。

もしくは彼女を愛しているけど、そのような行為が出来ない人間。もしかして・・・高井さんは同性愛者？」

「私は高井さんを愛しているわ。そうね。私、本人が気が付いてないだけで、同性愛者かもしれない。でも、あなたの推理は半分外れ。ところで、あなた、何者？ 私の幻術が利かないなんて。霊能力者。それとも、私と同じ悪魔契約者」

「さあ、どうかな」

「どつちでも、良いか。どのみち、死ぬんだから。ビフロン」

高井が悪魔の名前を叫ぶと、彼女の体から巨大な異形が現われた。身長は高井の倍の3メートルほど。上半身こそ人型だが、下半身は蛇のように化け物。

全身、白い炎で燃え上がる亡霊。いや、むしろ人魂が人型に集まった感じだろうか。

熱さは感じない。むしろ、命を吸い取られるような寒気すら感じる。

ビフロンは、死霊術や幻術にも長けているとあった。

警戒すべきは、幻術。そして、死霊術に優れていると言うことは、悪霊を召喚する可能性も否定できない。

「マルコシアス」

近藤は、高井と同じように、悪魔の名前を叫んだ。
が何も起きない。

力を貸してくれるんじゃないのか？

近藤は、女の言葉を思い出した。

「力を貸してくれるわ。多分」

確かに断定はしてなかったよな。

それに、やっぱり、一週間お試し無料契約がまずかったか。

どうする？ 逃げるか？

「どうしたんだ。何も起きないじゃないか。手加減はしないぞ」
そう言うと高井が召喚したビフロンが、近藤に向かって来た。

ビフロンは予想より遙かに素早く移動し、近藤は逃げるのは無理だと思った。

ビフロンは、一瞬で、近藤との間合いを詰めると、両手で近藤の首を絞め上げ、吊りあげた。

近藤は激しく抵抗をし、ビフロンを蹴りあげようとするが、ビフロンの体は霧のようで、突き抜けてしまう。

ビフロンの炎は熱さは感じなかったが、命を吸い取られるような寒気を近藤は感じた。

「どうしようかな。このままでも、生命力がなくなって死ぬ。取り憑いて自殺しても良いし。どっちが良い」

「どっちも嫌だね。死ぬんなら、お前も道連れだ。命をくれてやるぞ。マルコシアス!!」

近藤は、再び、悪魔の名前を叫んだ。

すると不思議なことに、体の中に力が溢れ、何かが体の中を通り抜けた。

そして、近藤の背後にも、天使のように翼を生やした人型の異形が現われた。

両手には……何も持っていない。どうやって攻撃するんだ。

殴るしかないか。

マルコシアスが、近藤の首を絞めているビフロンの両腕を叩くと、ビフロンの腕は容易に切断された。

高井が悲鳴を上げ両腕を抱える。

どうやら、悪魔へのダメージは本体へ連動しているようだ。

行ける。いや、行くしかない。

マルコシアスも、近藤の思考に素早く反応し、ビフロンに右拳を繰り出す。

右拳は、見事にビフロンの顔面を捉える。

まるでドライアイスに触れたときのような痺れや痛みを感じるが気にしている暇はない。

続いて 左拳を繰り出す。

そして、最後は右蹴りをビフロンの腹部に蹴り込んだ。

ビフロンは弾け飛び、屋上の入り口に激突する。

同時に、高井が悲鳴を上げ、しゃがみ込み。そして、嘔吐し始めた。

高井が動揺しているのは、近藤の目から見ても明らかだった。

近藤が悪魔契約者と戦うのが初めてあるように、高井も悪魔契約者と戦うのは初めてなのだ。

そして、その結果、明確な力違いあった。

昨日の女性が言っていた「マルコシアスは戦闘系だから、大丈夫ね」というのは、意外と正確な分析だったようだ。

ビフロンには何か秘密の能力、隠し玉があるのだろうか？

あったならば、動揺しないだろう。

「なに勝ち誇ってたんだよ。近藤」

高井は腹を抱えながら、立ち上がった。

「勝ったと思ってるんだろ。確かにお前の悪魔は強いよ。でも、水上は渡さないよ」

フラフラしており、限界なのは明白だ。

「絶対に!!!」

高井は、そう叫ぶとフェンスに向かって走り出した。

そして、ビフロンにフェンスを破らせると、屋上から飛び降りた。

急いで駆け寄る近藤。

屋上から下を覗くが、高井の死体も姿もなく、いつもと何ら変わらない大勢の人通りがあった。

十一時三十五分。

水上麗華が、井の頭公園のベンチで近藤を待っていると、突然、高井まどかが現われた。

いつもの元気な高井と異なり、顔色も悪く酷く疲れている感じだった。

急いで、高井のもとに駆け寄る水上。

「どうしたのまどか。すごく調子が悪そうよ」

高井は何も返事をせず、突然水上を抱きしめた。

そして、水上の耳元で呟いた。

「やさしいな麗華は・・・」

そして、突然、高井は泣き出した。

「どうしたのまどか。何かあったの」

「麗華・・・永遠の世界へ連れて行ってあげる」

第12話 あいの世界

「水上は渡さないよ」とは、どういう意味なのか。

水上に電話をかけるが、通信圏外か電源が切れていると言われちゃう。

水上が来なかったこと。メールが水上の携帯から来たことを考えると、水上は高井に捕まっている可能性が高い。

女性であり、車の運転もできない高井が、日中に人を移動されるの困難だ。

となると、どこか高井の馴染みのあるところに監禁している可能性が高い。

でも、いったいどこへ。

近藤は、見当もつかなかった。

昨日の夜に会った女性、自称茨の魔女に相談することにした。返信のメールを見ると、直ぐに会えるとのことだ。

マック で待っていると彼女は20分程で来た。

昨日とは違って、彼女は、どこかの高校のセーラー服を着て来た。だが、相変わらず大きなスポーツだけは持っていた。

「たぶん、あいの世界に逃げたのね」

「あいの世界？」

「物質世界と精神世界の間。真実と偽りの間の世界よ」

近藤には何を言っているか理解できなかった。

しかし、とりあえず彼女を信じて話を進めるしかなかった。

「どうすれば、その世界に行けるんですか？」

「行くこと自体は難しくないわ」

そう言つと、清水は赤いカプセル剤と青いカプセル剤を近藤に見せた。

「青いカプセル剤を飲めば、簡単にあいの世界へ行けるわ。問題は居場所ね。」

高井さんのことを思い浮かべて、薬を飲めば高井さんの作った世界へ行けるんだけど・・・あなた、高井さんのこと良く知ってる？」

「正直良く知りません」

「じゃあ、高井まどかさんの家に行きましょう。彼女の部屋を見れば、彼女のことを良く判るから」

「それより先に・・・」

「何？」

「名前教えてもらえませんか？」

自称、茨の魔女さんは、しづしづ名前を教えてくださいました。

本当に本名か判らなかつたが、清水葵と名乗った。

そして、彼女は、ストラスという知恵と知識がある悪魔と契約していることを教えてくださいました。

高井まどかの家の場所は、清水さんがネットから探し出した。

これも、悪魔の能力のひとつだそうだ。

高井まどかの家は、武蔵 大学側の閑静な住宅街にある二階建ての一軒家だった。

母親の趣味だろうか。庭は良く手入れされていて、玄関には色あざやかな可愛らしい花の鉢植えが数多く飾られていた。

着いて早々に、清水は玄関のブザーを押した。

返事がない。

留守のようだ。

清水は、門を開けて勝手に家の敷地の中に入って行く。

「良いんですか」

「良いわけではないだろ。不法侵入だ」

「鍵はどうするですか」

「開ければ良いだろ」

そう言うと、清水はスポーツバッグの中から怪しい道具を取り出し、鍵穴に差し込んだ。

5秒程度の時間で、扉は開いてしまい、清水は、どつどつと家の中に入って行った。

高井まどかの部屋は、ごく普通の女子高生の部屋だった。

部屋は、ほどほどに散らかっており、床や枕元には、ファッション誌や漫画や小説が積まれていた。

本棚には、ファッション誌や漫画や小説以外にも、悪魔や魔術、天使に関する書籍が何冊もあった。

引き出しの中には、何冊ものプリクラ手帳が合った。
写真を見ると、半分近くが水上とのものだ。

彼女の水上との関係、執着というべきだろうか、それが良く判る。

「日記とかはつけてないようだな」

「ブログじゃ駄目なんですか？」

「もちろん。駄目じゃない。ブログを見れば、その人の行動や趣味、人柄、人間関係はある程度判るからな。でも、ブログには家庭内の問題とか、その人の心の闇や本当に隠したいことは乗せないだろ。普通」

「心の闇が大切なんですか」

「重要だな。よりその人のことが判るだろ。そして、もっとも隠したい自分の本音といったところだ。君だって、自分の持っている心の闇を他人に知られたくないだろ」

「そうですね」

彼女の心の闇。

それは、おそらく水上が関連したものだろう。

「アイドルや好きな男の子に関するものが一切ないわね」

同性愛者。レズビアン。

それが彼女にとって一番隠したいこと、心の闇なのだろうか？

そもそも、彼女が同性愛者という明確な証拠はない。

彼女は、「そうかも」と言っただけだ。

なにが違うような気がする。

机の上あった写真は、ふたつ。

中学校の頃に取ったと思わる家族の写真と水上と二人で撮った写

真。

顔の幼さと、背景の緑の青さから考えると両方とも2年生の春くらいだろうか。

なぜ、両方とも2年生の春なのだろうか？

高井と水上の関係であれば、高校生になってからも何枚でも二人で撮った写真はあるだろうに。

彼女にとっては、この時代こそが一番の時代ということだろうか。

水上に最初に彼氏が出来て死んだのが、中二の夏。

高井にとってもそれより前の時間が、一番幸せな時代ということなのだろうか。

近藤には、ふとあることが思い立った。

急いで、玄関に行く。

そして、女性物の靴を調べ始めた。

後から清水が付いて来た。

「どうしたんだ」

「母親の靴がない。ある靴は埃を被った使われていない物ばかりだ。清水さん。高井の家族について調べてくれませんか」

第13話 高井まどかの世界

白い大理石で作られたアーチ型の天井とモザイク模様の床。

天井には、まばゆいばかりの装飾と色鮮やかな格調高いステンドグラスがあつらわれ、煌びやかな巨大なシャンデリアが吊り下げられていた。

巨大な王宮の最深部にある荘厳な謁見の間。

その最奥にある黄金の玉座で眠りつく、白いドレスを着たお姫様姿の水上。

側には、王子様のような姿の高井が寄り添っていた。

高井は、水上の寝顔を見ながら、3年前のことを思い出した。

高井まどかの母親が亡くなったのは、今から3年前の高井まどかが中学校2年生の春だった。

クモ膜下出血による突然死。45歳のあまりにも早い死だった。

母親に任せきりで、料理も洗濯もできない高井にいろいろと教え、助けてくれたのは水上麗華だった。

母親を失い、悲しみに沈む日々を暮らしていた高井まどかの側にいてくれたのも、水上麗華だった。

水上は、言葉による慰めこそ少なかったが、いつも側に居てくれた。

私を悲しみから守ってくれた。

今の私が居るのは、すべて水上のおかげ。笑っていられるのも、

泣くこともできるのも、全て水上のおかげ。

今度は、私が水上を守る。例え、悪魔の力を借りても。神に逆らっても。

「なんなんだ。あれは。まるでノイシュヴァンシュタイン城だな」
「あなた、よく舌を噛まずに言えたわね」

薬を飲んだ近藤と清水は気が付くと、深い森の中に居た。
森から見える丘の上には、まるで夢物語に出て来るような美しく優雅な白い城が立っていた。

「ここが高井まどかの世界よ。彼女が居るのは、あの城の中ね」
「まるでシンデレラの城だな。ボーイッシュなのに意外と少女趣味だったんだな」

「あら、全ての女の子は、ロマンチストであり、リアリスト（現実主義者）なのよ。知らなかったの」

近藤と清水は、緑に囲まれた城門までの急な坂をゆっくりと上がって行った。

城門の前まで来ると、巨大な城門がゆっくりと開き始めた。

「中に入れてことみたいね」

城門が一人一人通れるぐらい開くと、城郭の中からタキシード着た一人の、いや、一匹の二足歩行の白いウサギがやってきた。

目はウサギらしく赤眼で少し怖いが、毛並みはふかふかで、身長は腰ぐらいの高さなので意外と愛らしい。

「人面うさぎ？」

「人面犬みたいで嫌だな」

うさぎ人間は、小さい女の子の様な舌足らずな声を出した。

「せめて、うさぎ人間にしてください」

「かつ、かわいい。ふかふかだ〜」

「ど、どうしたんですか。清水さん」

「いや。ちよっと．．．．．魔力にやられた」

うさぎ人間が咳払いをした。

「本題に入ってよろしいですか」

「どうぞ。どうぞ」

「我が主は、城の最上階の謁見の間にて、姫君と共に待っているとのご伝言です」

「つまり．．．その道の途中に怪物を配置したから、ぶちのめして上がって来いってことね」

「左様でございます」

うさぎ人間は、伝言を告げると再び城郭の中へと消えて行った。

城門をくぐり城郭に入ると、手入れされた色鮮やかな花で溢れた美しい小さな庭に出た。

そして、正面には、白い巨大な城あった。

「で、どこへ行けば良いだ」

「知るわけないでしょ。こついう時は、とりあえず、大きい扉があるところに向かうのよ」

近藤たちは庭を通りに抜け、南棟の正面の大階段を軽やかに駆け上がった。

そして、大扉をくぐり、城の中に入ると、天井の高い広い長廊下に出た。

そこには、剣や斧、槍、弓など様々な武器を持った白と黒のトランプの兵士たちが四十人ほど隊列を組んで待ちかまえていた。

庭などに兵士が居なかったのは、城内で待ち伏せをしていたためなのだろう。

もうとも、トランプの兵士たちは、薄いつランプが胴体なので正直あまり強そうに見えなかった。

「どうやら。シンデレラではなく、不思議 国 アリスみたいだね」「あなたには、そう見えるの？ 日陰に居る兵士の顔を見てみなさい」「い」

近藤は、兵士たちの顔を凝視した。

日陰に居る兵士の顔は、日向の兵士と異なり骸骨だった。

「判った？ それが本当の兵士の姿。魔を闇の中でこそ本性を見せるのよ」

「で、どうするですか？」

「ぶちのめすだけよ。あなたはマルコシアスを召喚しなさい」

「それは良いんですけど．．．マルコシアス、素手なんですけど。魔法とか特殊能力ないんですか」

「そういうことは、もっと早く相談しなさいよ。とりあえず時間ないから相手の武器を奪いなさい。私はこれを使うわ」

そう言つと、清水さんは、いつも持っているスポーツバックの中から、巨大な機関銃を取り出した。

そして、トランプの兵士相手に一斉掃射を始めた。

清水さんの言葉はまさに有言実行だった。

近藤がマルコシアスを召喚し、十体ほどの兵士を倒している間に、残りの三十人の兵士を倒していた。

「こんな雑魚に体力や魔力を使っている暇ないわよ」

清水の指摘は正しかった。

城内は、想像以上に広く、部屋も多かった。

そして、何よりも敵が次々に襲ってきた。

トランプの兵士だけではなく、チェスの兵士や鎌を持った死神風の怪物などが次々に襲ってきた。

近藤は戦いの中で特殊能力に目覚めるかと思っただが、相変わらず変化なし。

新しく出来るようになったことと言ったら、戦闘中に邪魔な羽を出さない方法が判ったくらいだ。

結局、敵から武器を奪いながら進むこととなった。

城内を彷徨うこと1時間、敵を倒すこと何百体。

ステンドグラスがはめ込まれた吹き抜けの回り階段を上がると、ようやく、城の最上階にある大扉の前に着いた。

大扉がゆっくりと開き、中から再びうさぎ人間が現われた。

そして、深いお辞儀する。

「ようこそいらっしやいました。奥で、王様とお姫様が、お前たちのことをお待ちしておられます。ここから先は王様とお姫様がおられる神聖な場所、無作法がないよう。私めが、お前たちを案内いたします」

第14話 呪われた少女

謁見の間の壁や天井には豪華なステンドグラスがあつらえてあり、世界は七色の光で満たされていた。

そして、その淡い光の中、白いドレスを着たお姫様姿の水上麗華が、一段高い黄金の玉座で眠りについた。

側には、王子様のように白いマントに白いズボン姿の男装をした高井まどかが寄り添って立っていた。

「王様。ただいま連れてまいりました」

うさぎ人間がうやうやしく報告する。

「よろしい。後ろに下がっている」

「はい。王様」

うさぎ人間は、頭を下げたまま部屋の端へと下がる。

「良く来たな。その点は誉めてやろう。だが、早々に立ち去れ」

「着いた瞬間に立ち去れですって、待ってたつてわりには、御馳走も飲み物ないし、ずいぶん気が利かない王様ね」

「近藤。お前は麗華を愛しているのか。おまえでは麗華を幸せにはできない。麗華を幸せにできるのは私だけだ」

「私のこと無視かよ」

清水は呟いた。

「確かにそうだ。僕じゃ水上さんを幸せには出来ない。でも、だから言つて、水上さんが愛する人たちを殺す理由にはならないだろ。

そのせいで、水上さんを苦しめ、悲しませ、不幸にさせているのは、お前自身だ」

「確かにその通りだな。だが、世の中には、必要な苦しみもあるのだよ」

「何、勝手なことを言っているんだ。おまえ、水上さんの親友なんだろ。水上さんの人生のことを考えるよ」

「近藤。彼女は彼女なりに水上さんのことを考えているのよ。水上さんは・・・死人よ」

清水の言葉を聞いた時、高井の表情が大きく変わった。

「何言っているんだ。清水さん」

「彼女は、悪魔の力を借りて、死という事実を、あいの世界に閉じ込めたのよ」

暑い夏の日。

水上麗華は、彼女の部屋で、風鈴の様にゆっくりと揺れていた。

高井まどかが、水上を見つけたのは、最初の彼氏が死んでから一週間経った暑い夏の日だった。

夕方、高井が水上の家に遊びに行くと、水上は自分の部屋で首を吊って死んでいた。

首吊りは簡単にできる自殺だが、美しい自殺ではない。

血管が絞められ、顔がむくむだけではなく、目は充血し、最悪の場合飛び出す場合がある。

さらに、黄門などの筋肉が緩むことにより、糞尿が垂れ流しになるのだ。

そのため、自殺者の足元は、排せつした糞尿が溜まり、汚れている。

水上の部屋も、糞尿の垂れ流しにより酷い悪臭で満ちていた。

さらに悪いことに、エアコンが動いていない、締め切った南向きの室温は耐え難いほど高温になっていた。

死体は既に腐敗し始め、既にウジがわいていた。

綺麗だった水上が、私の憧れだった水上が、私の好きだった水上が。

醜い死体となり部屋の中央でぶら下がっていた。

水上の彼氏は、水上とのデートの帰りに、交通事故で死んだ。

水上は、彼氏が死んだのは自分のせいだと考え、ずっと自分を責め続けていた。

自分がいなければ、彼氏は死ななかつたと自分を呪い続けていた。

高井は、そんな水上を見ているだけで、力になれなかつた。

水上は、自分を支えてくれたのに。

そして、この結果。

高井は、水上を生き返らせてくれるなら、自分は死んでも良いと思つた。

神に祈つた。だが、神は答えなかつた。

高井は自分を呪い。こんな世界・運命を作つた神を呪つた。

高井の心からの慟哭に、神は沈黙したが、悪魔は答えた。

悪魔からの取引に、高井は喜んで乗つた。

水上が生き返ってくれるのであれば、どんなものを犠牲にしても良かった。

そして、高井は、悪魔と契約し、死という事実を、世界から消した。

その時の交換条件が、水上が性行為をしないこと。性行為をした場合、魔法が解け、水上が死ぬという契約になっていた。

命を捧げる気だった高井に取り、拍子抜けの条件だった。

しかし、高井は、水上の純潔を守るために結果として水上の愛した二人の人間を殺すこととなった。

そして、水上は「呪われた少女」となってしまった。

「死体を生き返らせることなんて、本当に出来るのか」

「できるわよ。十分な生贄さえあれば。でも、彼女がやったのは、死という事実、そのものを現実世界から消したのよ。生き返らせたのとは違うわ」

「何か良く判らないな」

「帰ったら、一時間でも二時間でも、みっちり説明して上げるわよ」

「お話は済んだかしら。でも、説明を聞けなくて残念ね。秘密を知った以上、もう見逃すことは出来ないわね」

高井は、白い冷たい炎の悪魔ビフロンを召喚した。

それにもない謁見の間に変化が現われた。

色鮮やかな美しい装飾は変色し、天国のような七色の光は失われ、白と黒のモノトーンの世界になっていった。

そればかりではない。大理石の美しい床や壁は汚れ、隙間から赤い鮮血が染み出し始めた。

瞬く間に、荘厳壮麗な謁見の間は、高井の罪とビフロンの能力を

具体化した死と穢れの世界へとなっていた。

「一対一で逃げたくせに、二対一で勝てると思っているのか。素直に諦めなよ」

「私の契約した悪魔はビフロン、死霊を操るネクロマンサーよ」
そう言うつと、高井まなみは、若い男の死霊を二体召喚した。

凄まじい悲鳴と共に、天井のステンドグラスを突き破り、全身が燃え上がっている死霊が現われた。

そして、近藤たちの背後の床にある血の池からは、巨大な鎌を持ち全身血まみれの黒いマントを羽織った死神の様な死霊が現われた。

「ただの死霊じゃないわよ。私が殺し、魂を取った二人よ。これで二対三ね」

「元彼つて、どんなふうに死んだんだっけ」

「一人は、飛び降り自殺。もう、一人は、消息不明で死因不明。でも、あの感じだと焼死みたいね」

燃え上がる死霊は清水に、死神の様な死霊は近藤に襲いかかってきた。

清水は本体である高井を直接狙撃するが、ビフロンが盾になり、ダメージを与えることが出来ない。

「こいつらを地道に倒すしかないか」

清水は、空中を自由に移動する死霊に対して銃で、近藤のマルコシアスは鎌を持った死霊に対して途中で拾った槍で応戦する。

近藤のマルコシアスの槍は、死神の鎌と何度となく刃を交わすが、徐々に相手の攻撃パターンが判ってきた。

鎌自体武器としては扱いやすいとは言えない上に、大きな鎌を振り回す死神の攻撃の隙は当然ことながら大きい。

マルコシアスが鎌をかわすと、大きな隙が出来た。

すかさず、槍で、死神の胸を貫く。

が・・・その程度のことでは、死神は倒れなかった。何事もなかったがごとく、動き続ける。

それどころか、自分ごと、マルコシアスを切ろうとした。

胴体が真つ二つになる死神。

マルコシアスはかろうじて避けたが、右腕を切られてしまう。

経験したことがないような激痛が近藤の右腕に走るが、痛みで苦しんでいる暇はない。

胴体が真つ二つになった死神は、磁石で引つ張られているかのごとく、引き合いすぐさま一体化した。

死神の胴体をいくら刺しても、死神は向かって来た。

手足を切断しても、生えてこそしないが、直ぐにくつつき、一体化した。

「駄目だ。刺しても切っても起きあがってくる」

「彼はもともとバラバラになっていたのよ。バラバラにしても無駄よ」

「ちくしょう。原子単位にバラバラにしないと駄目なのか。まあ、良い。他にも手はある」

マルコシアスは、死神の腕を切ると、その手にある鎌を奪った。

マルコシアスが鎌で死神の首を跳ねると、近藤が転がり落ちた首を拾った。

そして、目隠しをした。

とたんに、暗闇を歩く人の様、動きがチグハグになった。
「倒せないなら、無力化すれば良いだけさ」

一方、清水も苦戦していた。

近藤と同じように、死霊に弾を当てても、ダメージにはならなかった。

それに対して、空中を漂う死霊は、炎を吐きだして清水に襲いかかっていた。

「さすがネクロマンサーね。と言いたいけど、タネはだいたい判ったわ」

そう言うと、清水は、部屋の隅の柱に隠れているうさぎ人間を撃った。

同時に高井が悲鳴を上げた。

うさぎ人間の足元を見ると、清水の茨が絡みついている。

清水は悪霊の攻撃を避けながら、巧妙にビフロンの本体を探っていたのだ。

茨はさらに伸び、うさぎ人間をがんじがらめにする一方、清水は次々とうさぎ人間に容赦なく銃弾を撃ち込む。

うさぎ人間は、断末魔を上げ、もがき苦しみながら消えて行った。

その直後、玉座の側に居た高井は、血を吐いて倒れ込んだ。

第15話 エピローグ

近藤と清水は、倒れてた高井まどかの元に駆け寄った。

高井まどかから流れる血により、血溜まりが徐々に大きくなって行く。

高井まどかには、弱いながらもまだ息があった。

「なんとか、ならないか」

近藤が清水に懇願する。

「もう駄目よ。彼女は助からないわ。それに助けるべきでもないわ」

「麗華はどうなるの？ 私の麗華は・・・」

高井は虫の息で清水に尋ねた。

「彼女は大丈夫よ。水上麗華の死を見たのは、あなただけ。あなたが死ねば。水上麗華の命は本物になるわ」

「やっぱり、そうなんだ・・・良かった・・・麗華・・・」

・幸せになってね・・・」

そう言つと、高井は満足そうな笑顔のまま、死んでいった。

現実の世界では、高井まどかは急性のクモ膜下出血で死んだことになっていた。

そして、高井まどかの死をもって、水上と近藤との偽りの恋人関係は終了となった。

恋人は死ななかつたが、親友が死ぬというある意味より最悪な結果となり、「呪われた少女」という彼女に対するレッテルを剥がすどころか、強化する結果となってしまった。

当然のことながら、水上麗華は学校には来ていなかった。
自殺する心配はあったが、高井まどかの葬儀が全て終了するまで
は自殺することはないだろうという清水さんの意見を信じた。
事実、水上麗華は、ずっと高井まどかの側に居続けた。

近藤は高井まどかの葬儀に出る勇気はなかった。
出るべきか出ないべきかというところ、本当は近藤は出るべきなのだ
ろう。

しかし、自分が殺した人の家族に、どんな顔を向けたら良いのだ
ろうか。
妻に続いて、娘を亡くした心痛な父親の顔を近藤は、どうしても
見ることが出来なかった。

葬儀の全てが終わり、高井まどかが茶毘にふされた後、水上麗華
は自宅への帰路についた。
車で家まで送ると言われたが、断り、水上麗華は、歩きながらゆ
っくりと帰ることを選んだ。

住宅地を歩いていると帰路の途中に、近藤信也が居た。

「待っていてくれたの」

「少しばかり」

「ごめんね。デートできなくて」

「しょうがないよ。それより、ごめん」

「近藤君が謝ることじゃないよ」

「私ね。引越した事になったんだ。母方の祖母の居る京都にね」

「ずいぶん急なんだね」

「話し自身は、ずいぶん前から話はあつたんだ。環境を変えるべきだって」

「．．．．．そんなんだ。京都で良い友達が出来ると良いな」

「言うことは、それだけ？」

「．．．．．」

「近藤君。私が自殺するかもって、心配していたんでしょ」

「ああ．．．」

「しないよ。するわけじゃない。だって．．．そんなことしても、まどかが喜ばないでしょ。私はまどかのためにも、幸せにならないと．．．頑張つて生きる努力をしないといけないのよ。そうでしょ」

「そうだね」

特に話すことも、ただ歩いてみると直ぐに水上の家に着いた。水上の家は、イメージ通りかなりの豪邸だった。

「近藤君」

水上の呼びかけに振り向く近藤。

「そんな心配そんな顔しないで。私。もう大丈夫だよ」と水上は微笑んだ。

その直後、水上は、近藤の首に手を回すと、近藤にキスをした。

「すきだらけだよ。近藤君。気をつけなくちゃ」

相変わらずキスに慣れない近藤の顔は、どんどん赤くなって行く。

「結局、最後まで近藤君の方からキスしてくれなかったね。でも、それが近藤君らしくて良いよ」

「．．．．．」

「バイバイ。そして、さようなら」

水上は、そう言うと家の中に入って行った。

「結局、それ以降は会わなかったわけだ」

近藤は一週間ぶりに、×公園で清水と会うことになった。

近藤から話をしたく呼び出したのだ。

相変わらず、清水はブランコのところで近藤を待っていて、ブランコに乗りながら話をする事となった。

「まずかったですかね」

「良いじゃないか。彼女は、最後に『さよなら』を言ったわけだから。彼女の中での区切りだったんだろ」

近藤もそう思った。だから、それ以降、彼女に会わなかったのだ。だが、近藤は自分の判断に自信がなかった。

「結局、僕が余計なことをやったばかりに、最悪の結果になったのではないだろうか」

「どうかしらね。少なくとも高井まどかが、これ以上人を殺すのを止めることは出来たわけだし」

今日の清水さんは、気のせいかな、だいぶ優しくかった。

「そうかもしれませんが・・・」

「それに、高井が言ったことは、この世界の真実ではないわ。この世界では水上麗華は自殺していないし。全ては高井の妄想。そう処理されるのよ。そして、私たちが知っていることも、やったことも、妄想との違いはないわ。この世界に魔法は存在しないんだから」

「.....」

「納得できない？ 当り前よ。そう簡単に人の死が割り切れるものじゃないわ。それで良いのよ」

清水さんは、自分なんかよりも、遙かに多くの死を見てきたのだらうと近藤は思った。

「少しは話せて、楽になった？」

「ええ、だいぶ楽になりました」

「良かったわね」

二か月後。

「信也。手紙が来ているぞ」

近藤が居間でテレビを見ていると、姉の真桜が夕刊や他の郵便物と共に、手紙を持ってきた。

「どうせ、通販でしょ。捨てて良いよ」

「違うぞ。元恋人の水上さんからだぞ」

急いで、姉の真桜から手紙を奪う近藤。

そして、急いで2階に上がり、自分の部屋で読み始めた。

「拝啓 近藤信也様。 ごきげんいかがでしょうか」

手紙の内容はあいさつから始まり、新しい学校で、新しい生活を始め、新しい友達ができたことなどが書かれていた。

そして、一枚の写真が入っていた。そこには新しい友達に囲まれた笑顔の彼女の姿があった。

近藤は思わず嬉し涙が込み上げてきた。

彼女が新しい人生を歩み始めている。このことこそ、高井まどかが一番望んでいたことなのではないだろうか。

最後に、ペンフレンドになってくれませんかと書いてあった。

今時、ペンフレンドか……それも、悪くないかな。

近藤は机の中を探り、便箋と封筒を探し出すと、返事を書き始めた。

第15話 エピローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。短編のはずが伸びに伸び、ようやく。終わりました。

相変わらず描写が苦手。戦闘が淡泊ですが・・・楽しんでいただけたでしょうか？

今後は、閑話の後に「恋のまじない」編が始める予定です。では、今後とも、ごひいきの程よろしくお願いいたします。

PS 励みになりますので、できれば評価・感想をお願いいたします。

【閑話休題】 ストラスの多事雑言

近藤信也が目を覚ますと、白い部屋に居た。

壁も床も天井も白く。唯一の家具であるソファーと鳥かごさえも白かった。

白くないものと言えば、近藤自身と、鳥かごの中に居るフクロウくらいだろう。

「ようこそ、真実の部屋へ」

鳥かごの中のフクロウが話しかけてきた。

「何が、真実の部屋だ。単に、あとがきだろ。しかも、ストラス。

お前、作品の中に出てないじゃないか」

「しょうがないだろ。作者に腕がなくて、出れなかったんだから。ところで聞きたいことがあるんだろ」

「そうでした。何で、高井が死ぬことにより、本当の命になるのか、判らないのですが・・・」

「本来こういうのは、作中でしつかり説明するべきなんだが、作者の腕がないからな。あとがきで説明するしかないんだな。私も、結局出れなかったし・・・」

ストラスの愚痴は続いた。

「そろそろ、本題に」

話が進まないの、近藤が先に進むことを願う。

「重要なのは、水上の死体を見て、死を認識にしたのが、高井しかないと言う点だな。近藤も清水も直接見たわけじゃなくて、高井から聞いただけと言うのがポイントだ」

「認識したから、現実になるわけじゃありませんよね。現実には認識

とは関係なく存在しているんじゃないんですか？」

「少年。認識と起きた現実とは、密接に関連しているんだよ。『シュレインガーの猫』って知っているかな」

「『VAN E PROJECT』が販売している奴ですか？」

「それは、『シュレインガー 猫耳少女』だよ。オタクな会話をすると、女性が逃げるぞ。特に体育会系の小野寺みたいな女性はな。『シュレインガーの猫』だ」

「知っていますよ。早い話が・・・箱の中の猫が死んでいるか、生きているか箱を開けて確かめた瞬間に決まる」って話ですよ。たしか『パラレルワールド・平行世界』と関係していたような」

「まあ、そんなところだな。『確かめた瞬間』つまり『認識した瞬間』というのがポイントだ。別の言い方をすると、『箱を開けて、確かめなければ、猫は生きているか、死んでいるか決まっていない』とも取れる。箱の中の世界は、『パラレルワールド』。極端な話、なんでもありの世界だな」

「なんでもありの世界ですか？」

「そう。そして、次に重要なのは、観測者の言葉を信じるかどうかだ。観測者が扉を開けて中を見たとする。

観測者が猫が死んでいると言った場合、猫は100%死んでいるのだろうか？」

「そうとは限りませんよね。嘘をついている可能性もありますから」
「その通り。そして、もっとも重要な点は、観測者以外の人間にとって、相変わず箱が閉じているのと変わらないという点だ。

つまり、観測者が、箱を開けて猫の死を見てしまった場合、猫が生きている可能性はゼロだ。でも、観測者が死ねば、可能性はゼロではなくなる。その場合の猫は、生き返ったわけではなく。もとから生きて居たわけだ。判ったかな」

「なんとなくは判りましたけど．．．結局．．．．．良く判りません。」

「それは．．．まずいぞ。魔法の原理もほぼ同じだからな」

「そうなんですか？」

「箱の中の世界は、『パラレルワールド』。極端な話、なんでもありの世界というのがポイントだ。つまり、魔法があってもかまわな
いと言うことだ」

「気のせいか．．．『うみねこ なく頃に』の魔法の解釈と似てい
ますね。パクリですか」

「オマージュ・インスパイアと言ってくれ。もっとも、作者として
は『ラプラス 魔』のパクリなんだけどね」

「結局は、パクリじゃないですか．．．．．」

【閑話休題】死の鐘 その1

「ねえねえ、小野寺。『死の鐘』って噂、知ってる？」

昼休みの教室で、演劇部の久保恵は、ショートヘアの可愛い友人、小野寺瞳に話しかけた。

「知らない。知りたくもない」と小野寺は目を閉じ、耳をふさぐ。

小野寺は、都市伝説とか怪談話とか、怖い話が苦手だった。

特に、演劇部に所属している久保の話は、話し方が上手いせいかなぜか異常に怖い。

しかし、小野寺が怖い話が苦手なことを知っていて、話しかける久保だ。

こんなことで、話が止まるわけがない。

久保から見ると、ここまで反応が良いと話がいがある。

小野寺は、弓道をやっている時は凜々しいのに、こういうところで、子供っぽい仕草をする。

このギャップが、久保にはたまらない。

正直、癖になる。

ネットで仕入れた都市伝説を教室で、皆に（特に小野寺に）話すことが、近頃の久保の趣味になっていた。

一方、小野寺では小野寺で、怖い怖いと言う割にはしっかりと聞いている。

結局、好きなのだ。

怪談話など怖い話を苦手な人には、2種類のタイプが居る。

怖い怖いと言って、結局、聞くタイプと聞かないタイプ。

小野寺は、当然前者だ。

そして、こういう人材は、場を盛り上げるために欠かせない存在でもある。

周囲の友人も、久保の話はもちろん小野寺のリアクションを楽しんでいる節がある。

抗議すると、「甘やかすだけが友情じゃないのよ」とのことらしい。何とも厳しい友情だ。

「これは、友達の友達に、実際に起きた話なんだけど・・・自分にしか聞こえない鐘の音が聞こえたら、もうすぐ死んじゃうんだって・・・」

久保は、静かにゆっくりと、まるで見て来たように都市伝説を語り始めた。

ある日、突然、少女だけに聞こえ始めた教会の鐘の音。

友人や両親に話しても信じてもらえない。

病院に行っても、特に異常はないと言う。

ちょうど、その頃から、夜な夜な変な夢を見るようになった。

内容は、目覚めると全て忘れてしまい。恐ろしい夢としか思い出せない。

そして、目が覚めると体のどこかに、痣や傷が出来ていて、それらは日に日に酷くなって行った。

少女は両親に心配をかけないように、傷を隠したけど。

結局、ちよつとしたことから両親にバレて、少女は精神科へ連れて行かれることとなった。

医師は、夢の内容を知ることにより、少女の心がより判ると考え、少女に催眠術をかけ、夢の内容を語らせた。

少女の夢の内容は、鐘の音を聞こえた後、生きたまま死者の世界に連れて行かれて、怪物に襲われるという荒唐無稽なものだった。少女の傷や痣は、怪物に襲われ出来たものだと言つ。

結局、少女は精神病院に入れられることとなった。

病院に入っても、彼女は悪夢を見続けた。

病院は悪夢を見ないようにと、強い薬を飲ませて、夢を見ないようにしたわ。

それ以降、彼女は悪夢を見なくなった。

でも、一週間後、少女は病院の庭で死んでいるのが発見されたの。

不思議なことに、庭にある防犯カメラも壊れてしまって、映像は残っていなかったわ。

でも、彼女は死ぬ間際に友人に携帯電話をかけていたの。友人が聞いた彼女の最後の言葉は。

「次はお前だ．．．」

背後に居た同じ演劇部の星野が、わざと、声を低くして、小野寺の耳元で囁く。

下を向き、何も言わない小野寺。

「どう。面白かった。」と尋ねる久保。

「面白いわけないでしょ。怖かったよ。それに星野君もひどいよ。」

久保と組んで、私を虐めるんだから」

「ごめんごめん。つい、小野寺さんのリアクションが楽しくて」
そんな怖い話ではなかったのだが、最後の演出が利いたのが、小野寺の目には薄らと涙が浮かんでいた。

「ねえ．．．．．どうしたら、避けられるの」

小野寺が、小声で質問する。

「たいてい、こういう都市伝説には回避方法があるものだ。

口裂け女ならポマード。ドラキュラなら十字架に、ニンニクだ。

「魔法を使うのよ。ポケットの中にタロットカードがあつて、カードに封印されている『悪魔の名前』を叫ぶと、魔法が使えるようになるんだって。それで怪物を倒すの」

「なんか、急にゲームみたい」

小野寺は、急に怖くなくなった。

「でも、噂なんてそんなものですよ。途中から、とんでもない回避法が追加されるのは。でも、話には続きがあるんだ」

小野寺が聞き耳を立てている。

久保は、それを見て、わざと小野寺を焦らす。

「．．．．．生き残っても、結局、最後はカードの悪魔に殺されちゃうんだって」

小野寺の眼には、また薄らと涙が浮かんだ。

「ところで、星野。近藤は起こさなくて良いのか」と久保。
星野の座席の後ろでは、近藤が昼食も食べずに寝ていた。

「そうだよな。いつもは昼飯だけには起きるんだけど、今日は酷いな。起こしてやるか」

「星野君。優しいのね。ほっとけば、良いのに」と小野寺。

「そももいかないよ。起きる近藤。朝だよ」
起きない。

星野が耳を引っ張ると、近藤は目を覚ました。

「おはよう。星野」

「おはようじゃないだろ。もう昼休み終わっちゃうぞ。早く弁当食べろよ」

近藤は眠気眼とで周囲を見渡した。

「学校か。ところで今日は、何曜日なんだ」

「月曜日だよ」

「判った。ありがとう」

そう言つと、近藤はまた眠りだし、結局、部活の時間まで寝ていた。

【閑話休題】死の鐘 その2

目が覚めると、近藤は棺の中にいた。

正確に言うならば、目が覚めたのではなく、そういう夢を見ているのだ。

『死の鐘』を聞いた者たちは、異界に引き込まれる。

ここがその異界。無数にある、あいの世界のひとつらしい。血と錆にまみれた死の世界。

目が覚めたならば、早急に棺から抜け出し、逃げる必要性がある。この世界には、怪物が存在していて、グズグズしていると襲われるからだ。

棺の蓋を押し、身を起こし辺りを見渡した

今回の場所は・・・街中・・・田無駅のペDESTリアンデッキの上・・・

最悪ではないが、良い場所ではない。

人が多いところは、ゾンビも多い。この二週間で少し判ったことだ。

前回の小平の商店街とは、比較にならない程、人が多い。

案の定、駅や商店街の店舗などから、次から次へと怪物が出て来る。

しかし、調子に乗って、戦い続けるようなことはしない。

戦うよりも、逃げる。これがこの世界に来て学んだこと。

幸運なことに、寝巻きではなく、ちゃんと外出ように私服で、靴も履いている。

怪物と戦っても、怪我すると痛いし、得るものは無い。

たいていのゾンビは動きも鈍く力もたいしたことは無いのだが、中には、バットや刀、斧など凶器を持った奴らが居る。

二日目に、油断をし、刀に切りつけられたことがあったが、その時は、左手の手首から下を切り落とされた。

そんな体験をしたことはなかったが、激痛で意識がその瞬間遠くになった。

朝起きたときにも、手首の周りに、ミミズ腫れができていた。

催眠術にかかっている人に、焼けた石だと言って、氷を手で持たせると、手に火傷の水腫れが出来ると聞いたことがあるが、それと似たようなものだろうか？

ならば、首を切られた場合、どうなるんだらうか？

首にミミズ腫れができるのだろうか。

それとも、シヨック死だらうか？

とてもじゃないが、試す気にはなれなかった。

近藤はとりあえず、建物の屋上へと逃げた。

人が来ないところには、ゾンビも少ない。

そのため、出来る限り屋根など高いところに逃げるようにしている。

中には、這い上がってくる怪物や襲ってくる鳥などもいるが、集団に囲まれるよりかははるかにましだ。

清水さんも、無事に逃げたのだろうか？

正直、連絡手段がないので判らない。

等価交換。

契約の代償。

言い方はいろいろあるだろうが、悪魔と契約した者には、鐘の音が聞こえ引き込まれるようになるらしい。

命を取られない代わりに代償行為なのだろう。

もっとも、悪魔と契約しなくても、巻き込まれる人が居るらしい。惨い話だ。

鐘が鳴るタイミングは判らないらしい。一日に二回鳴ったこともあれば、二週間鳴らなかったこともある。ただ、一つ判っているのは、満月の日には必ず鳴り、もっと強い怪物が出て来るらしい。

いったい、こんな世界を誰が作ったのだろうか？

清水さんが言うには、ここは世界の破棄溜。ゴミ捨て場だそうだ。

十年以上前の話。

一人の少女が、カードの正統後継者、聖女に選ばれた。

その少女こそが、カードの魔力に負けることなく、カードの力を正しく使うことができる聖女だった。

カードはタロットカードを模して造られており、合計七十八枚。

魔力の源として、ソロモンの七十二柱の悪魔や七つの大罪の悪魔などが利用されており、通常の魔道師が扱えるようなものではなく、特別に選ばれた女性のみが扱えるものであった。

カードの力は驚異的なものであり、カードの力を用いれば、どんな願いも叶い、どんな世界も作ることができた。

少女は、カードの力を使い人々が、幸せに暮らせる天国を作ろうとした。

ここは、その際に作られた、人々の憎しみや悲しみ、罪や業を捨てるためのゴミ捨て場。

つまり、近藤や清水は、ゴミ捨て場に召喚され、ゴミと戦っていることになる。

肝心の天国は、建設途中で破棄されることとなった。

聖女が、何者かに襲われ、神隠しにあったためだ。

いったい誰が何のために、聖女を襲ったかは不明だが、その結果、十年以上もの間中断していることは間違いない。

その後、正統後継者が居なくなったカードは、所有者を求め彷徨うようになった。

新しいカードの持ち主は、聖人君主ばかりではない。

カードの力の源である悪魔の誘惑に負け、魔道に走る者も多かった。

そして、それにより多くの悲劇が起こされた。

清水さんはカードを集めているが、自分は正統後継者、聖女ではないと言った。

それを使って何をしたいのか、尋ねても、「今は、まだ言えない。でも、私を信じて」としか答えくれなかった。

いつかは、教えてくれるのだろうか？

近藤は、恐ろしくて、それ以上、尋ねることは出来なかった。

第1話 失恋したのか？

「信也。お前振られたんだってな」

朝食を食べるために席に付いた近藤が、姉の真桜まおから言われたのは、朝の挨拶ではなく、この台詞だった。

「振られたと言うより、彼女が引越しをしまして・・・」

「遠距離恋愛しているわけじゃないんだろ」

「そう言う訳ではないですが・・・」

「それを振られたって言うんだ。信也。お前にあげた 아이폰 没収だ」

「没収って、それはないだろ。第一、姉さんは、既に5（ファイブ）持っているから、必要ないじゃないか」

「里桜りおにあげる」

突然、自分に振られて、戸惑う里桜。

「里桜は、今の携帯で満足しているよ」

「決定事項だ」

姉の暴君モード発動。

小学校中学校と近藤の人生は、どれだけ姉に振り回されただろうか。

いっぽう、近藤は、別のことも考えていた。

やっぱり、一週間限定にしたのが、いけなかったのだろうか？

考えても答えが出そうもなかったので、近藤は悩むのを辞めた。

よく晴れた雲ひとつない青空の日になると、近藤は、ときより教室を抜けて、学校の屋上で、一人で昼飯を食べるようになった。

その時に、思い出されるのは、水上麗華と高井まどか。

彼女たちの会話、笑顔、食べたご飯。

全てが懐かしく、愛おしく思われた。

彼女たちの時間は、実際のところ、ほんの数時間だったけど、近藤にとって、一生の思い出になっていた。

彼女たちのことを思い出した時、うつすらと涙を流すので・・・

・ 傍から見ると、振られて悲しんでいるように見えるらしい。

「近藤君」

近藤が、空を見ていると、背後から声をかけられた。

振り向くと、そこには、ショートヘアの利発そうな少女が居た。

近藤の憧れたの女性、小野寺瞳だ。

「近頃、居眠りしていることも増えたけど。一人で屋上でご飯食べていること、多いよね」

なぜ、小野寺さんが、ここに居るのだろうか。

近藤は不思議に思ったがあえて訊ねなかった。

「ねえ、近藤君の隣で食べて良い？」

小野寺さんは、近藤の隣に座ると、お弁当を広げた。

「良い天気だね」

「そうだね」

近藤は再び、空を見上げた。

「ねえ。近藤君」

近藤は視線を降ろし、小野寺さんを見た。

彼女は、その愛らしい目で近藤のことを見つめていた。

「近藤君。ここに居る時ってさ……やっぱり、水上さんのことを思い出しているの」
「……………うん」

「水上さんと近藤君って……………意外と、似合ってたね」
「そうなの？」

その話は、近藤にとって意外だった。自分自身は不釣り合いだとずっと思っていたからだ。

「何と言うか……でこぼこ感というか、ほのぼの感がね」

でこぼこ感とほのぼの感では、だいぶ違った感覚だと思うが、近藤はあえて突っ込まなかった。

「星野君から聞いたわよ。水上さんが呪われてないことを証明するために、水上さんと付き合ってたんですってね」

「うん」

「本当に、それだけだったの」

彼女は悪戯っぽい口調で、近藤をからかうように言った。

「本当は、彼女のこと。好きだったんじゃないの。水上さんは、美人だし、頭が良いし、性格も良かったし……………」

「どうなんだろう。僕には他に好きな人がいたし。でも、どこか惹かれるものがあったのは、間違いなかったけど……………」

「えっ、誰？ 近藤君の好きな人って。私の知っている人？」

君なんだけど……………近藤は、そう言いたかったけど、当然そんな勇氣はなかった。

「内緒。いつか教えてあげるよ」

「けち」

「僕は、けちじゃないよ」

「じゃあ、近藤君のだし巻き卵ちょうだい。美味しいんだってね。水上さんと高井さんが誉めてたよ。私も食べてたい」

「良いよ」

小野寺は、近藤の弁当から、だし巻き卵を取り、パクリと一口で食べた。

「美味しい！！ 近藤くん料理上手なのね。良い旦那さんになれるよ」

「小野寺さんは料理しないの？」

「基本しないかな。お弁当もお母さんが作ってくれるし」

「そうなんだ」

「がっかりした」

「多少」

小野寺は、大きな溜息をついた。

「やっぱり、男の子って、料理が得意なことが好きなのよね。私も頑張らなくちゃ」

「そうだね」

「ハッキリ言うな。近藤君は。何でもできる優等生の水上さんと比べないでよ」

「比べてないよ」

「本当？」

とりとめない話をしながら、お昼休みは過ぎて行った。

「やっぱり、お前のしわざか」

近藤は、演劇部の部室にいる星野を見つけると、昼休みのことについて問いただした。

「そうだよ。でも、楽しかっただろ」

「確かに楽しかったけど・・・小野寺さんになんて言ったんだ」
「そこは・・・企業秘密。俺は俺なりに、信也のことを心配していたんだぞ。そもそも、水上さんのことは俺がお前に頼んだことだし、それにしても、現実には上手く行かない。偽りの恋人同士から本物の恋人同志へなんて・・・小説みたいには行かないか。
それとも、役者がまずかなかったのかな」

演劇部の脚本家兼役者の星野守が失望感をあらわにした。

「すみませんね。大根役者で。第一、僕は役者じゃないし」

近藤が演劇部に入ったのは、星野の影響だ。

星野に憧れて入ったとか、友達だから影響されたとかではなく、巻き込まれたと言っべきだろう。

星野は、父親が大泉の映画会社で働いている影響もあり、小学生の頃から脚本に関心があり、小説を書いていた。

中学校三年くらいのときには、大手の無料小説サイトに登校して、数千人単位の固定ファンまで得ていた。

その星野に昔から目をつけていたのが、演劇部の前部長の大森香織だ。

大森香織は、星野や近藤と同じ中学、小学校出身のため、星野のことを知っていたのだ。大森香織は、熱心に星野を勧誘した。

そんな大森香織に対して、星野が出した条件が、近藤信也と一緒に入ることだった。

中学校時代の近藤は、陸上部に所属しており、近藤は陸上部が帰宅部になるつもりだった。

演劇に入ることを渋る近藤に対して、大森香織が使ったカードは、

近藤の姉だ。

大森香織と近藤の姉の美桜は、学年こそ違うが顔見知りだった。

近藤は、姉からの圧力により、演劇部に入ることになり、星野も入ることになったのだ。

「ただいま」

近藤は両手にスーパーの袋を持って帰って来た。

「おかえりなさい」

先に帰っていた妹、里桜しおが元気良く返事する。

近藤が晩御飯を作るために台所に立つと、すまなそうな顔で、妹の里桜が話しかけてきた。

「お兄ちゃんごめんね。里桜のせいで携帯取られちゃって」

「里桜は悪くないよ。悪いは、あの暴君です」

「お詫びに、お兄ちゃんに良いこと教えてあげるね」

「何？」

小学校六年生に成長した可愛い妹が何を教えてくれるのか、近藤には見当もつかなかった。

「今、小学校で流行ってる。絶対かなうって噂の『恋のおまじない』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5093y/>

悪魔と契約しちゃいました

2011年12月29日06時49分発行